

山寺から見た大学(院)教育

山にこもった名僧たち

歴史上のでき事をふくめて、社会のでき事にはどうもよくわからないことが多い。

私は大分以前から奈良時代から平安時代初頭にかけて、山の中に建てられた山寺について考えている。このように書くと、山寺というものが奈良時代から存在したのか、などとも言われそうであるが、そういう点をいま論じようとしているのではない。ただ、山寺にかかわることで、私たちのような者にはどうもよくわからないことがあるのであ

る。それは次のようなことである。

平安時代初頭に現われた二人の天才的宗教家、最澄と空海は、どちらも山に入って修行した人である。青春時代の貴重な時期を山に入って過したのである。仏教僧侶にとって山中修行は当然のこと——と極くすなおに考えておけばそれで済んでしまうことなのであるが、よくよく考えてみるとどうもそう簡単なことではないのである。

最澄はかぞえ年十九歳の延暦四年(七八五)四月六日に東大寺戒壇院で受戒した直後、七月十七日に一人比叡山に登って草庵を結び、いわゆる山中修行に入った。彼の名前は十年後には天皇周辺にも知られ、十九年後には中国へ渡っ

田中日佐夫

て本格的に天台の法を身につける機会を得たのである。

一方、空海もまた、十代の終り頃学んでいた都の大学を中退、以後、延暦二十三年（八〇四）に三十二歳で入唐する前年まで山中修行を続けていたようである。そして最澄もそうだったのであらうが、空海もまた、中国に渡った途端中国人も感嘆するような文字を書き、詩文をつくり、しかも彼の場合、言葉にも通じ、広大無辺の情報量をおのがものとする事ができたのである。

彼らは十八、九から三十歳までどのような学問をしていたのであらうか。

私が不思議に思うのはそこなのである。

私のような人間には理解することのできないことではあるが、ただ単に「悟る」とか「覚る」などということならば、山中において荒行・苦行の末に可能であらう。しかし、荒行・苦行だけで、中国人を驚かす文字が書けるようになり、詩文がつくれるようになり、中国語がしゃべれるようになるのだらうか。天才の存在を私は否定しないが、しかし、いかに天才であつてもこのようなことが可能であるとはどうしても思えないのである。

もちろん最澄は十八歳で正式な戒を受けるまで人一倍勉

強をしていたであらうし、空海は大学を中退するまで猛烈な勉強をしていたにちがいない。しかし彼らが山にこもるとき所持することのできた仏像や經典や文房具類などは、ごくごく限られたものであつたであらう。それまで身を置いていた国分寺や大学で使つていたものにくらべて、それはあまりに貧弱な資料類であり、勉強道具であつたにちがいない。むしろ、山にこもった時点において、知識を集積するという勉強からは切り離されたのではないか。だが、それでどうすれば、それまでに身につけた学問知識を記憶の谷間に埋没させることなく、逆に十年後には中国人の中で通用する本格的な学問を身につけた人間となることができるのだらうか。彼らがそうなのは事実である。

彼らは一体どのように勉強していたのであらうか。

山寺の実情

前述したように、いかに天才だからといって、なにもない山の中を十年間めぐり続けていただけで大きな学問体系を身につけることができたとは思えない。そういうところから私は、当時にあつても、最澄の登った比叡山や空海が

巡礼した数多くの山々にはすでに相当の規模をもった山寺が存在し、そういうものがある種の文化センター的性格をそなえていたのではなからうか、と想像している。つまりそういう山々をめぐることによって、行による「ざとり」に至るとともに、学問・知識の集積もできたのではないかと考えているのである。

これもそう的はずれの想像ではないだろう。事実、最澄は、吉野の比蘇山寺に晩年を過した唐僧道璿ののこした教えから、新しい仏教への示唆を与えられていたという。おそらく、各地の山寺にはいろいろな道の専門家があり、それをめぐり尋ねていろいろな知識を身につけることができただけなのである。

しかし、ここでふたたび深い疑問にぶつかるのである。いかに各地の山寺にそういう専門家がいたとしても、そういうところを遍歴して知識を身につけるよりも、東大寺なら東大寺という、いまの総合大学よりもすごい規模を具えた大寺の中で勉強した方が、先生も大勢おり、仏典や資料もそろっており、便利で、身につく勉強ができたのではないだろうか、ということである。

空海自身、次のようにうたっている。

山中に何のたろしみ楽らくか有る 雑言

山中にどんな楽しみがあつて

そのままこんなに長く帰ることを忘れていいのか

一冊の秘密の教典とつづり合わせの衣

雨にぬれ雲にしめつて沙塵さじんといっしょに飛ばされ

いたずらに飢えいたずらに死んで、何の益があるのか
どんな師もこのことをまちがいだとするだろうに

これは『遍照へんじょう發揮はつはい性靈集せいれいしゅう』巻第一に収められている「山

中有何楽なになが雑言」のはじめの部分である（筑摩書房『弘法大師空海全集』第六巻による）。ここにうたわれている内容は、た

しかに、当時にあつても一般的な考え方だったと思う。しかし空海は、この冒頭部分に答えるかたちで、次のように続けている。

あなたはご覧にならないのですか、あなたはお聞きにならないのですか マガダ国の鷲峰じゆふはシャカの住

まわれた所であり

シナの五台山ごたいさんは文殊菩薩もんじふさの廬いふろのあつた所と

（中略）

一身に具^{そな}わる肉体・言葉・精神のはたらきは塵や水滴
以上の普遍性をもち

全宇宙を支配する仏に身を捧げている

ひとすじの香の煙とひとくち口ずさむ經典

悟りというすばらしい結果はそれによってもたらされ
る

季節の花ひとにぎりと言一句

頭を地につけて一礼して天子さまに感謝する

八種の守護神はうやうやしい態度で仏徳に潤い

生きとし生けるものは一念一念のうちにそれぞれ真実

を証明する

智慧の刀を揮^{ふる}って切り割^きけばすべてが料理され

英智の火を少し放つと灰も残らない

生死の対立を離れ、三つの迷いを超越し

四つの魔もの、無数の障碍も心配する必要はない

大空はがらんとして仏陀の放つ光は遍^{あまね}く輝き

ひっそりとして作爲のない生き方は楽しいではないか

どうも最後のところになってくると、私などの理解の範
囲を超えた宗教的さよりの力を賛嘆する内容になってしま

う。だから前に述べた問題——大規模な研究機関に自から
絶縁して「一祕典百衲衣」のみであの知識大系を身につけ
ることがどうして可能であったかという——には答えてく
れない。ただ「慧刀揮斫無金牛。智火纔放灰不留」という
「慧」と「智」が、山中修行——大寺を離れ、一般的に言
う専門家集団の組織体を離れ、俗世間の社会集団を離れて
という一面をもつ——によって獲得されたものであったと
言いたかったことだけはたしかである。

ところでこの時代、いまから考えれば貴重な青春の時期
を大寺の組織から離れて新しい成果を得ることができたの
は、なにも最澄や空海だけではなかった。最澄が弟子たち
のために制定した「山家学生式」^{さんけがくせいしき}の中では「十二年間比叡
山より外に出ることなく修行させたい」と言っている。彼
の弟子たちはもちろん山中修行で大きな成果をあげてい
た。が最澄の仏教学理上の論敵であった徳一なども、おな
じく山中で修行する人だったのである。

あえて言いたい「情報遮断」期の必要性

人間の教育というものには二つの面というか、二つの段

階というか、そういうものがあるように思う。自分にとってもわかりやすく考えたいため、たとえば話をつくってみよう。

人間を一つの茶碗にたとえる。一定の形をめざしてつくる必要はない。さまざまな形をしたものがあつてよいのである。ただ、よくこねあげた土を使つて緊密な肌合いのものをこしらえなければならぬ。これが幼稚園から十代の終りまでの教育ではないだろうか。この間の茶碗の形成には、なによりもよくこねあげた土を惜しみなく使い、のびのびとした形にしあげることと心かけねばなるまい。そしてそれに成功したとしよう。

しかし茶碗というものは、外形だけではしかたがないものである。湯茶を入れる大きな空間が必要である。茶碗のつくり方にはいろいろな作り方があるが、その中央に大きくうがつた穴を、より大きくより美しいものにする段階が、次の段階としてある筈。そのときには、いままで使つてきた土を思い切つてうがち、けずることに全神経を集中する必要がある。

人間の形成時にも最も必要なのは、この穴をうがち、土をけずり取る段階なのではないだろうか。そして最澄や空

海やその他大勢の僧侶たちが青春時代にふみ切つた山中修行とは、この段階をなしとげるためのものであつたのではないだろうか。私はそう考えるのである。この段階を経た人間は、そのうがつた空間の中に多くのものを入れることができ、そのすべてのものを「智慧の刀を揮つて切り割^き」き料理することができるようになつたにちがいないのである。どうも学問的に証明できることではないようであるが、人間の形成段階とはそういうものらしいのである。

いまの高等教育で最も欠けているのは、この人間に大きな空間をうがつ段階ではないだろうか。

ただたとえ、青年たちがそういう段階を求めても、なかなか手に入れることができないように社会全体がしむけ続けていることも事実である。知識の情報集積ばかりを求めているのである。しかし、いまこそ必要なのは、青年にある大きな空間をうがつチャンスを与えることではないだろうか。いや、そのチャンスをものがものにしたいという、そういう意欲が生れるように導くのが高等教育なのではないだろうか。とさえ私は言いたいのである。

現在ほど情報があふれている時代はなかった。そしてその情報を集積し記録し、利用することも現在ほど進歩した

ときはなかった。その情報を集積して管理する空間も、いままでになく巨大であり、そういうものを一人一人が持っているようにさえ見える。このように見ることは、誤りでもなく、錯覚でもないかもしれない。しかし、その集積可能な情報がいかに多くなっても、その情報をえらび集積し、そこから必要な情報を再度えらびどのように活用するかということは、結局のところその人間の器の大きさによって決まるものだと思ふのである。

そして前述のことはもう一つ別の面から評価することもできるのである。

現在とはしかに、情報を集めることはいままでになく可能な時代である。しかし、その反面、その情報を送り出す現実の多様な諸相に触れることは、この上なくむずかしい世の中になっているとも言えるのである。いまのように細分化され、極端に専門組織の厚い壁によって分割された社会にあつては、一人の人間がそのいくつかの壁の中に入つてその実態を把握することは非常に困難なのである。

たとえば大学から大学院に学び、そこを出てすぐに大学に勤めたり博物館に勤務したりする人間は、普通のサラリーマン社会を知らないままに、自分の専門分野の組織の中

でのみ棲息することを余儀なくさせられる。学問分野によつては、それはそれでよいことかもしれないが、こと一般の人々とかかわりの深いところに存在する事象を学問の対象としてえらんでいる人間にとっては、これはよい状況とはいへまいと思ふ。研究者を普通の人たちから隔離し、あまりに特殊な環境に追ひこむことは、学問の内容を豊かなものにするどころか、やせ細ったものにするだけであろう。現代社会における学問の宿命がここにあるのではなからうか。

ところで、ここでまた山寺で修行した古代の大徳について考えてみよう。彼らは仏教の道を志し、俗世間を出て大寺で学んだ者である。それが大寺の組織をも出て山の中で学んだのである。それはもちろん、俗世間にもどることを意味したのではない。しかし、その行為は、生活している一般人の心を宗教者にふたたび教えてくれるものであつたと思ふのである。山中修行者はいったん仏教を志した者として俗世間に入ることはゆるされなかった。しかし組織に頼らず孤独であるだけに、直接俗世間にかかわりをもたぬ限り、自からの生命の維持もおぼつかなかった筈である。ここに彼らは、誰よりもよく世間の人々の生活を見、その

心を知ることができたのではなからうか。多くの情報の現場にかかわることができ、宗教者の生きるべき場を把握することもできたのではなからうか。最も俗世間から遠く離れていたように見える山中修行者の中から、新しい時代に人々の心の師となる宗教家が出現した理由はこのあたりにあるのだと、私は考えるのである。

物よりも心、人間の心のあり方がよりさしせまった問題としてとりあげられているいま、私たちが学生に与えたいことは、ただ単に「心」を考えることなく、また、単に膨大な情報を集積しそれを分析することでもない。むしろ多くの情報からは一時遮断されることがあるかもしれないが、わずかな情報でもその現場を知り、その中から普通人々の生活とその心を知る機会であり、その機会を求める心なのである。もちろんそういうことを言ったとて、それが現代社会でどれだけ可能なことかということはとてもむずかしい問題である。それは知っているのだが、ただ、そういうことがより多くのゆとりを持って可能かもしれないのは、国・公立の大学よりわが成城大学のような私立の大学だと思うのである。

そこであえて自戒の念をこめて最後に言いたいことは次

のようなことである。すなわち、わが大学、あるいはわが大学院にあっては、大学の中退者が大学にもどるとき、大学院の途中でいったん社会に出た者がふたたび院にもどろうとするとき、思い切って寛大な態度で受け入れようではないか、そしてむしろ積極的に、学生がいったん普通の社会に出ることを奨励し、あるいはまた教師の判断で情報集積の研究コースから一時離脱するような処置も取れるような環境をつくっておこうではないか、ということである。

くり返しになるが、人間の心に深くかわった人々——前述の最澄や空海はもちろんのことキリストなどもふくめてよいであろうが——は、青春時代「情報遮断」の時期を経験していた。また新しい時代を切り開いた人々が学んだ学校も、松下村塾をもちだすまでもなく設備や情報量(情報の質ではなく)においては、決してすぐれたものではなかったのである。しかし、そこで学ぶ者は、むしろそのことによって、より大きな器の空間を得たのである。いまこそ、このところを、私たちは、真剣に考えるべきだと思うのである。